

「止めませんよ。ゆいさんが、こんなに綺麗な声で鳴いてるのに。……最後、一気に100%まで上げますね」

「まって、うそ、だめ……っ！ ああああっ！！ やだ、あ、ああああ！！」

蒼真くんの指がスマホを滑る。

視界が真っ白に染まった。

指一本触れられていないのに、パッチを通して流し込まれる強制的な快感の濁流。

椅子の上で身を振り、背中を反らせて、私は自分の意思とは関係なく、抗えない絶頂へと突き落とされた。

「ひ、あ……が……っ！！？ ああああああ——っ！！」

激しい痙攣のあと、ガクガクと震える膝を支えることもできず、私は椅子に崩れ落ちた。

乱れた呼吸と、ぐっしりと汗ばんだ肌。

そんな私を、蒼真くんは膝をついて、うつとりと見上げていた。

「……あれ。ゆいさん、ただのリラクゼーションなのに、いっちゃったんですか？」

彼は跪いたまま、私の乱れた髪を優しく耳にかけ、信じられないほど甘い声で囁いた。

「……可愛い。……指一本触れてないのに、僕のアプリだけでこんなに乱れちゃうなんて。よっぽど、溜まってたんですね」

羞恥心で死にそうだった。けれど、それ以上に身体が恐ろしいほどに「重い」。

強制的に開かれた神経が、パッチの振動が止まった今も、ズキズキと熱い痺れを訴え続けている。

アプリの振動じゃなくて、もっと太くて熱い、彼の指で直接触って、奥までかき回してほしい。そんな淫らな衝動が、脳内を真っ黒に埋め尽くしていく。

「……あ、……ほしの、くん……っ。……たすけて……、なんか、まだ……ずきずき、して……っ」

佐藤先輩に触れた不快感も、朝からの焦燥感も、全部彼の熱で塗り潰されていく。

彼の舌が口内の粘膜をなぞるたび、脳の芯が痺れるような熱が広がる。抗う隙など与えないほど執拗で、深い。逃げ場を塞ぐように添えられた彼の手が、後頭部をぐいと引き寄せ、さらに深く、奥まで繋がってしまう。

「……っ、ふ、あ……」

給湯室の狭い空間に、水音の混じった艶めかしい吐息が漏れる。

まだ会社なのに。すぐ外には佐藤先輩や他の社員たちがいて、いつ誰が入ってくるかもわからないのに。

(……だめ、こんなの、見られたら……)

そう思うのに、彼に引き寄せられるまま、私はしがみつくように彼の肩に手を回してしまっていた。背中に回された彼の腕は力強く、私の身体を逃がさないように密着させている。

「……んっ、あ……ふ、……っ」

深いキスの合間、彼がわざと私のうなじのパッチの痕を指先でなぞるのがわかって、頭がどうにかなりそうになる。

恐怖と背徳感。でもそれ以上に、昨日からずっと求めていた「本物の熱」に全身が支配されて、自分でも驚くほど身体が熱く、甘く蕩けていく。

「……結衣さん、ここ、会社ですよ？……こんなに濡れた瞳で僕のこと見て。他の人に見られたらどうするんですか」

彼は唇を離すと、耳元で意地悪く囁いた。

ハッとして身を引こうとしたけれど、腰を抱く手の力は緩まない。

「……星野くんが、……っ、あんな、誘い方するから……っ」

「あ、ああああっ……！ ほしの、くん……っ、もう、……おかしくなる……っ」

「おかしくなっているのは、数値を見れば一目瞭然ですよ。……ほら、デバイスの拍動がこんなに速い。……あなたの『いきたい』っていう命令が、僕の手元のモニターを真っ赤に染めてます」

彼はスマホの画面を私に見せつけた。

そこには、私の心拍数や体温の変化が、無機質なグラフとなつて激しく波打っている。私の恥ずかしい本能が、すべて彼に可視化され、管理されている。

「……お願い、……とめて、……じゃなくて、……っ」

「『じゃなくて』？ ……ちゃんと言わないと分かりませんよ。……この精密なデバイスでも、『結衣さんの本当の望み』までは言語化できませんから」

彼はわざと指の動きを止め、焦らすようにその場所をじりじりと圧迫するだけにする。

早く動かしてほしい。もつと強く、デバイスごと壊すくらいに掻き回してほしい。

そんな浅ましい期待で、私の身体は勝手に彼の指を求めて腰を浮かせてしまう。

「……っ、……いかせて。……星野くんの手で、……はやく、……っ」

「いい子ですね、結衣さん」

彼は満足げに目を細めると、今度は片手で私の胸のカップを、もう片手で股のデバイスを同時に、指先で強烈に押し込んだ。

「……じゃあ、サンプリングを再開します。……最後、一気に100%まで上げますね」

「スッ……」と、彼が画面を最上部までスワイプした瞬間。

全身のデバイスが、今までの比ではない暴力的なまでの振動と吸引を開始した。

「ああああああ——っ！！！！」

ぐり、と指の腹でクリトリスを押し潰された。

パッチの100%の振動に、彼の指のダイレクトな刺激が加わり、全身が感電したように跳ねる。

「……あ、あああああつ???♡♡……っ、なに、これ……っ♡」

思考が、言葉が、真つ白な快楽の濁流に飲み込まれていく。

全身に張り付いたデバイスが、狂ったような速度で拍動し、私の肉を内側から激しく、執拗に抉り出した。
「あああああああ——っ!! まって、まってえっ!! とまらない、これ、なに……っ、おかしいよお……っ♡♡」

胸を吸い上げる真空の圧力が限界まで高まり、乳首が引きちぎれんばかりに膨張する。それと連動して、股の間のデバイスが私の最も敏感な場所を「グチュグチュ」と物理的にあり得ない速度で震わせ、吸い込み、逃げ場を完全に塞いだ。

「ひ、あ、あああああ——っ!! い、い……っ、いつちやう、い、ああああ!!」

一回目の絶頂が、暴力的なまでの衝撃で身体を突き抜ける。

けれど、蒼真くんは止めてくれない。100%に固定された数値は、私がいった後も容赦なくその場所を、ズリズリと、激しく振動させ続けている。

「……あ、あ……っ、まだ、うごいて……っ、だめ、ああああああつ!!♡」

「止めるわけないでしょう? ……結衣さんの身体、今最高に『美味しそうなデータ』を吐き出してますよ。

……ほら、二回目」

「ひぐっ、ああああつ!! うそ、また、すぐ……っ、ああああああつ!!♡♡」

いかされた直後の、触れられるだけで痛いほど敏感な場所に、機械の冷徹な振動が休みなく突き刺さる。波が引く間もなく、二回目、三回目と、強制的な絶頂が絶え間なく押し寄せた。

身体が弓なりに反り返り、喉の奥から聞いたこともないような獣じみた悲鳴が溢れ出す。

「……っ、ふ、ああああっ！！ きもち、よすぎ、て……っ、こわれちゃう、こわれ……っ、あああああ
っ！！！！」

蜜が、汗が、涙が、ぐちゃぐちゃに混ざり合ってシーツを汚していく。

自分の意思なんてどこにもない。ただ、彼の指先が動くたび、スマホの画面を滑るたびに、私の神経は強制的に快楽の頂点へと叩き上げられ、突き落とされる。

「……すごい。心拍数も、体温の変化も、限界値を突破した。……結衣さん、見てください。あなたの身体、もう自分じゃ止められないくらいに、快楽に支配されてる」

「あ、あ、……あ、ああ……っ！！」

意識の輪郭が溶けていく。

ただ、狂ったように震えるデバイスの音と、それ以上に激しく波打つ自分の快感の音だけが、耳元で「じゅるじゅる」と鳴り続けている。

何度も何度も、連続して繰り返される絶頂の波。

私は、彼が用意した「100%」の地獄……いいえ、極楽の中で、ただ無様に、幸福な絶叫を上げ続けるしかなかった。

激しい波が過ぎ去った後、私は指先ひとつ動かすこともできずに、ただ深くシーツに沈んでいた。視界は涙でぼやけ、熱くなった吐息を繰り返すことしかできない。